

背面開放座位訓練が遷延性意識障害患者のコミュニケーションに及ぼす影響

Effect of sitting position training on communication of patients with persistent vegetative state

市原 康也、中村 美津、石山 光枝、奥村 歩、篠田 淳

木沢記念病院 中部療護センター

Yasunari Ichihara, Mitsu Nakamura, Mitue Isiyama, Ayumu Okumura, Jyun Sinoda

Kizawa memorial hospital of Minokamo city, Gifu, Japan

【はじめに】背面開放座位訓練は自立神経活動を促すことや抗重力筋に作用することが報告され意識改善につながると言われている。当センターでは意識改善の一環として背面開放座位訓練を施行している。今回、背面開放座位訓練が介護者とのコミュニケーションに改善を及ぼした影響を検討したので報告する。【対象】当センター入院時にコミュニケーション能力に乏しく背面開放座位訓練を行って来た交通事故により頭部外傷を負った遷延性意識障害患者12名。【方法】対象者に背面開放座位訓練を30分～1時間、毎日施行し、東北療護センター遷延性意識障害度スコア表(以下スコア)をもち「眼球的動きと認識度」「発声と意味のある発語」「簡単な従名と意思疎通」「表情変化」の項目を、入院時と1年後を比較し検討した。【結果】「眼球的動きと認識度」では7名に改善が見られテレビを見て楽しめるようになった。「発声と意味のある発語」では3名に改善が見られ発声が聞かれるようになった。「簡単な従名と意思疎通」では8名が首を振ることが可能となり、うち4名が首振りにて意志表現が可能となった。「表情変化」では7名に改善が見られ笑うことが可能となった。【考察】背面開放座位訓練を行ってきた患者の多くが、首振りによる「はい」「いいえ」の返答や発声、笑うといったコミュニケーション方法に改善が見られている。なかでも首振りによるコミュニケーションを確立した患者が多いが、これは座位訓練により僧帽筋の拘縮が改善され、また筋力が増強することにより首の可動域が広がり、広がったことで周囲への関心が高まりテレビを見るなど視覚刺激量が増加し意識覚醒につながったのではないかと考える。